国際協力特別賞

異文化理解の先に

名古屋大学教育学部付属中学校　２年　小西　正記

今も人と人、国と国とが争っている。資源や領地の奪い合いもあれば、パレスチナ問題のように宗教や歴史が複雑に入り組んだものもある。こう聞くと他人事のようにも思えるが、互いの思い込みによる喧嘩なども同じであり、またそれは誰にでも起こり得ることだ。そう思い知らされた出来事があった。

昨年の道徳の授業。そのゲームは何の説明もなく、まるでレクでもするかのように始まった。共通ルールは「無言でジェスチャーのみ可能」。４人の班ごとにルール説明の紙とトランプが配られた。手持ちのトランプを小さい数順に出していき、10 分経った時点での残りの枚数で勝敗を決め、1 位と最下位が他の班の人と入れ替わる。2 回目で入ってきた2 人は、僕らと正反対にトランプを大きい順に出し始めた。僕はルールを間違えているんだと思い、必死にジェスチャーで伝えようとしたが伝わらないままだった。新しい人が来るたびにカードの出し方が皆違い、繰り返すうちに僕は混乱した。なぜ皆がこんなにおかしなことをするのだろうか。思うようにコミュニケーションが取れない事へのいらだちもあった。移動してきた人も同じ思いだっただろう。実はこのゲーム、異文化コミュニケーションゲーム「バーンガ」といい、最初の班ごとで少しずつルールが違っていたのだ。それを先生から聞いた僕たちは、そういうことかと納得すると同時に、言葉が通じないことの無力さ、いかに普段自分中心で物事を見ているのかに気付かされた。このように、言語の違いなど何らかの障害があり、相手と自分の文化の違いを認識していなければ、自分を否定されたように思ってしまい、いらだちや憎しみの感情が生まれることがある。この時僕は「異文化理解」の必要性を肌で感じることができた。今後、文化的背景の異なる外国人との交流が増えれば、言語だけでなく物事の感じ方などあらゆることが違う、異文化というものがますます身近になっていくだろう。

以前我が家にホームビジットでやって来た中国の留学生は、僕たちの「いただきます」と言う姿を見て驚いていた。調べると、感謝を込めて挨拶するのは日本だけで、世界的にみても珍しい習慣だと分かった。また、お疲れ様やお願いしますといった概念も日本特有のものだそうだ。他国の文化を知って初めて自国の文化の良さに気付くこともできる。そして相手が「その概念を知らない」と知れば無用な混乱や衝突を避けることができる。

自分たちの文化に重きを置くことは必要だ。しかし、僕たちはそれにとらわれていないだろうか。最も大切なのは、常に自問自答する姿勢で、自分たちの文化を発信しつつ、他の文化を知ろうとする気持ちだと思う。日頃から自分と他者との間に生まれる些細なズレや疑問を、否定ではなく興味関心につなげ、その背景や歴史にも目を向ける。そうやって互いの文化を理解し合うことが、これからの未来のための小さな一歩になると僕は考える。